

第1章:斜陽の聖域と悪魔の契約

銀座の裏通りにひっそりと佇む、完全紹介制のオートクチュール・メゾン『アトリエ・クレア』。

三代続いたその重厚な扉の向こう側で、五島 玲奈(ごとう れいな)は、手垢のついた帳簿を前に、力なく肩を落としていた。

かつては政財界の婦人たちがこぞって袖を通した至高のシルクも、今や埃を被り、父が遺した莫大な負債という名の重しが、玲奈の細い首を締め付けている。

「……もう、限界なのね」

シルクのように滑らかな指先が、最後に残った上質なサテンの生地をなぞる。その時、静寂を破るように、低い、だが冷徹なまでの響きを持った声が届いた。

「美しい生地だ。だが、それを纏う主を失った布は、ただの死装束に過ぎない」

玲奈が顔を上げると、そこには夜の闇をそのまま切り取ったような漆黒のスーツに身を包んだ男が立っていた。

嘉神 律(かがみ りつ)。

新進気鋭の投資家として名を馳せる一方で、その強引な買収の手口から「冷血な収集家」と囁かれる男だ。

「嘉神様……。アポイントメントは明日のはずですが」

「気が変わったのだ。没落を待つ女の顔は、月の下で見るのが一番相応しいと思ってね」

嘉神は玲奈の制止を無視して、アトリエの奥へと足を踏み入れる。彼の視線は、玲奈の端正な顔立ちから、仕立て屋としての矜持を象徴する凜とした立ち姿、そしてタイトなスカートから伸びる、傷一つない白皙(はくせき)の脚へとゆっくりと這い回った。

「五島玲奈。君の店を救う用意はある。負債の全額肩代わり、そしてこのメゾンの維持。……ただし、私が出す条件は一つだけだ」

嘉神は懷から一通の書面を取り出し、裁断机の上に放り出した。玲奈が震える手でそれを手に取ると、そこには異様な文言が並んでいた。

『被雇用者は、雇用者の提供する衣類以外、一切の着用を禁ずる。また、その着脱および管理は、すべて雇用者の差配に従うものとする』

「……これは、どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味だ。君は今日この時から、私の『型紙』になる。私が君のために選ぶ服だけを纏い、私が望む場所で、私の所有物として振る舞ってもらう」

玲奈の喉が小さく鳴った。それは屈辱と、そして説明のつかない戦慄によるものだった。だが、背後に迫る破滅の影が、彼女の拒絶を封じ込める。

「.....わかりました。契約、いたします」

嘉神の唇が、三日月のように残酷に歪んだ。